7 頸部痛、のぼせ、動悸、呼吸困難、抑うつを主訴に来院したLOH症候群に対し、東西医療をあわせて奏功した一症例

グッドライフ病院泌尿器科[1)]、愛媛県立中央病院漢方内科[2)]
松本　裕子[1)]、寺野　友美[2)]、山岡傳一郎[2)]

要旨

LOH(late-onset hypogonadism)症候群とは、加齢男性性腺機能低下症候群、男性更年期障害とも呼ばれ、病態は加齢にともなう血中の男性ホルモン低下により起こる諸症状である。疲労倦怠感、筋力低下、性機能障害、気分変調、活動や認知力の低下、睡眠障害、循環器呼吸器症状など多彩な症状を呈する。治療適応があれば、テストステロンエナント酸エステル製剤の補充(ART)が行われ、治療有効率は報告により異なるが、おおよそ50%前後で何らかの自覚症状の改善が見られるとされている。多彩な症状の症候群であるがゆえに個々の病態、証は多様であり、西洋医学的な病態把握、東洋医学的証の判定を組み合わせると、より個人にあった治療を提供できると考えられる。今回、頸部痛、のぼせ、動悸、呼吸困難、抑うつを主訴に来院したLOH症候群に対し、西洋医学的診断と東洋医学的証の判定をあわせて短期間で治療が奏功した症例を経験した。症例は40歳代男性。初診−6年起業し自営職となった。初診−2年から頸部痛、動悸、呼吸困難を自覚し、徐々に出かけるのが億劫になった。初診年より頭部が頻繁にのぼせるようになり、LOH症候群を疑い当科初診した。本人はうつ病かもしれないと思ったことがあるが専門医は受診していなかった。BP139/92、PR82/min、BMI32.8、喫煙歴20本/日×30年、ECG12:WNL、採血生化学検査で多血症(Hb17.4g/dl)、脂質異常症(HDL34mg/dl、LDL159mg/dl、TG229mg/dl)、遊離テストステロン(fT10.6pg/ml)は低値を認めた。顔は浅黒く、腹力4/5と体格良好、目力もあり実所見であるが、体格に比べると話し方は穏やかな印象であった。舌診腹診ではお血所見がみられ、僧帽筋、広背筋の緊張が強く、軽度の円背とストレートネックを認めた。頸部痛、呼吸困難、動悸の症状強かったため、頸部痛は整形外科、呼吸困難は呼吸器内科、動悸は循環器内科各科に紹介したが、現段階で治療介入を要する疾患は認めず経過観察となった。相対的に当科での治療介入が必要と判断し、LOH症候群に対してART(125㎎、2週間毎)を開始した。1か月で多少気分が明るく、多弁になったが、家族にイライラ当たることも増えた。東洋医学的に上熱下寒、駆瘀血を目標に加味逍遙散3包分３毎食前、長時間のデスクワークがある日は葛根湯3包分３毎食前を頓用で合方した。加味逍遙散を開始してからのぼせは１回のみとなった。ふだん症状は9割ほど改善し、長時間のデスクワーク時の頸部痛に対しては頸椎アライメントの修正ならびに良肢位坐位の指導など引き続き継続している。LOH症候群は東西医学を融合して適切に患者の病態と背景を捉えれば、比較的長期経過の症例でも多彩な症状を改善しうる。